した。すなわち、二点のポイントは、今世の最大のターニングポイントを迎える準備段階ということでした。

私自身もほんの数年前までは、皆さんと同じ基盤、すなわちこの世の常識、慣習等の中で物事を見て、自分の中で判断し、これは正しい、これは間違っている、何でこうなのだと批判しながら、自分というものを掲げてきました。しかし、そういったものから、自分の心を解き放していった時に、見えてきたものがあったのです。今までとらえてきたものとは、全く違う風景に心が触れた時に、ああ自分は本当に間違ってきました、真実から遠くかけ離れてしまった自分自身でしたと思うことができました。そして、ようやく自分自身を本当の人生のスタートラインに立たせたことを実感している、今現在です。

二〇〇六年八月　塩川香世

父の病気と他力への道

私は、物の豊富な時代に生まれました。両親にも恵まれ、三歳年下の弟が一人います。四千グラムを超えて大きく生まれましたが、身体は弱かったと聞いています。母のお腹にいた頃は、つわりがひどかったとも聞いています。そして、ようやく母が私を産み落としても、祖母が「まだ生きているか」と心配するくらいに身体は弱かったし、癇は強かったらしいで

著者の幼少時代

す。とにかく手のかかる子供であったことに違いありませんでした。そういうこともありますが、何しろ私は最初に授かった子供なので、両親はもちろん周りの方々にも大変可愛がられて育てられました。それは、幼い頃の写真からも窺えます。子供可愛さで、両親はできる範囲のことはみんなしてくれていたようです。

私は身体が弱くて、小学校四年生の時に扁桃腺の手術をするまで、しょっちゅう熱を出していました。それが、母を他力信仰へと走らせた原因のひとつになるかもしれません。もちろん、このことだけではありません。私達一家には大きな悩み、苦しみがありました。それが、まず一つ目のポイントである父の病気でした。

私の記憶には、父が昼間から布団をかぶって寝ていたあの当時のことがあります。それは私が小学校の入学前に、真新しい学習机を前にワクワクしていた頃です。父は高等学校の教諭をしておりましたから、たぶん春休みだったのでしょう。私は、新しい机とランドセルや色とりどりの文房具にご機嫌

だったのに、寝ていた父から「うるさい」と一喝され、驚いたのを幼心に憶えています。私はその時、初めて父から怒鳴られました。たぶん、私のガサガサさせる音が寝ていた父の耳にビンビン響いたのだと思います。私は、それから、父の態度が周期的におかしくなるのに気が付きました。布団をかぶって部屋を真っ暗にして、何日も何日も部屋に閉じこもってしまうのです。私の脳裏には、部屋を真っ暗にして昼夜を問わず寝込んでいる父の姿が、何度も浮かび上がってきます。

日本赤十字病院の精神科へ通い、診断の結果、出された病名は鬱病でした。どうやら、この病は結婚前からその兆候があったようです。私は母を恨みました。そして自分の家庭を呪いました。母さえ、もっと注意していれば、こんな父と結婚しなかったはずだ、そうすれば私は生まれてこなかった、私はもっと明るくて楽しい家庭に育てられてきたはずだ、この思いを私は幼くして、ずっと抱き続けてきたのです。

鬱病または躁鬱病に代表される精神病というのは、今では、ストレス社会

が生み出した病気あるいは弊害であると世間では理解も深まっていますし、それなりに配慮されるようになってきましたが、当時はまだ、精神病というものに対して社会は閉鎖的であったし、当事者達も隠しておきたい病気だったと思います。私も忌まわしい病であると思ってきましたし、友達などには絶対知られたくはありませんでした。

また、どのような病気でもそうですが、いっしょに暮らしている家族でなければ、その苦しみとか悲しみ辛さ、不安恐怖等々は実際のところ、分からないと思います。いえ、家族にすら、それを本当に受け止めることは難しいです。特に精神的な病の場合はそうだと思います。それは、なぜそのような状態になるのか、何が原因なのか、そういうことが全く理解できないからです。原因が分からないから、どのように対処していけばいいのか、それも分からない状態なのです。私の家族もそうでした。本人はもちろん、家族全員が、それぞれに苦しみ辛さだけを主張し合うだけでした。病気だから、家庭の雰囲気は当然暗いです。そこへさらに、互いに互いを責め、嘆き、愚痴り、

恨んでいく、そうした暗い真っ暗な思いだけが、家族の中で流れていくという日々だったと思います。

そもそも、病気というひとつの現象は、それぞれがそれぞれに培ってきた心の世界を見るものだと、その時、誰が教えてくれるでしょうか。誰も分からないし、誰も知らないし、ただ目の前の苦しみを何とかしよう、したい、してくれ、このような思いで明け暮れる毎日だと思います。病人を抱えている家庭では、この病気さえなければ、もっと幸せに楽しく明るく暮らすことができるのにという思いから、挙句の果てには、「お前さえいなければ」「お前がいるから私達は不幸なのだ」「何で私達はこんな苦しい目に遭わなければならないのか」「私達が一体何をしたのか、世間は不公平だ」と散々そんな思いばかりを出し合うのではないでしょうか。私達親子も例外ではありませんでした。そしてみんな行き着く先は、助けてくれるものを、何とかしてくれるものを、つまり助けを救いを外に求めていきます。「迷える先祖の霊を供養しなさい」「因縁を解消しなさい」と言われれば、お金をつぎ込みます。いい

と言われることは藁にも縋る思いで何でもしていくことでしょう。そういうエネルギーをどんどん膨らませていくのが、人の常だと思います。いわゆる他力信仰の名のもとにみんなが群がっていくのです。

分かります。人はみんな何の疑問も抱かずに、無意識のうちに、自分と自分の家族の安泰、幸せを願っています。家内安全、無病息災、そうであれば、幸せな人生が送れると思い込んでいます。また、先祖を大事にし、我が子孫を残し、家、財産、家名を引き継いでいくことは当然のことであり、勤勉に働き、そして社会に奉仕していくことは立派なことだと思っています。そして何より、つつがなく過ごせることが幸せだと、社会の流れの中でみんなそれに沿った生活をしているのではないでしょうか。また、そのための選択肢が世の中にはたくさんあるように思われます。

中でも、その人が秀でた能力、頭脳等、その他社会が認めてくれる才能を持っていたなら、その人生ほど素晴らしいものはないとなってくるでしょう。実際、権力、資力、人力も自由自在、世界は私中心に動いている、そう思われている方々も、この世にはたくさんおられると思います。

しかし、そうではなく、すなわち逆にマイナスの部分が現れてきたならどうでしょうか。病気であるとか貧乏であるとか、たとえばこの世的に見ればマイナス部分ばかりが大きくなっている人生は、本当に真っ暗な暗闇の人生でしかないのでしょうか。そしてそれとは逆に、華々しく輝いているような時間を過ごしている人達は、本当に幸せと喜びの中にあるのでしょうか。価値基準がこの世であれば、そうでしょう。お金がないよりあるほうがいいし、病気よりも健康なほうがいいに決まっています。権力や知力等々も同じだと思います。そしてだからこそ、それらを得るために、自分の人生をその基準に合わせて、馬車馬のように走り抜けようとするのです。そして、自分の思うようになれば、大成功の人生ということになるでしょう。サクセスストーリーがもてはやされ、シンデレラドリームに酔っていくということだと思います。途中、何度か何らかのきっかけがあって、ストップがかかるけれども、それを跳ね返す欲のパワーで、さらに先へ上へと上り詰めようとします。し

かし、誰もそれを欲とは思っていません。むしろそのエネルギーは賞賛されるべきものなのでしょう。頂点を目指して燃焼する人生は素晴らしい人生であり、それが人生なのだ、だから頑張れ頑張れとエネルギーを自らに注入していきます。名を残し、財を築き、子孫を増やして一大帝国を築けば、それが立派な人生だと世間は認めます。歴史に名を残す人は、偉い人、立派な人となっています。

しかし、ここで考えてください。生まれてきた人間は必ず死を迎えます。肉体生命の終わりを迎えます。それでは、私達はそこで本当に終わりなのでしょうか。

死は肉体が消滅する時ですから、肉体が基盤というところにあれば、その人の人生はそこで終わりということになります。では、本当に肉体が朽ち果ててしまえば、その人は消えてなくなるのでしょうか。もし、そうでないとするならば、その人はそこからどうするのでしょうか。肉体を脱ぎ捨てて、墓の下で永遠の眠りに就いているのでしょうか。

人生がそこで終わりで、その人もそこで終了するならば、限られた人生の時間の中、この世限りと頑張るのも、また、おもしろおかしく生きていくのも分かりますが、私はそうでないということを感じています。人生というものを、そして自分というものを、もっと長い時間の中で見つめていかれたらどうかと思っています。

話をもとに戻します。

私の父は、そうです、ずっと私が物心ついた頃より、鬱の状態でした。この病は、これほど人間の面相が変わるのかと思うほど、鬱の時と正常な時とでは雲泥の差でした。父の調子のいい時と悪い時は、本当に天国と地獄の違いでした。病気が父をこんなに変えるのかと、何度もその病気を呪いました。本当に二重人格そのものでした。

父の顔色を窺いながら、父の精神状態を気にしながら、私はおもに十代を過ごしてきました。と言っても、年がら年中、具合が悪いということではなく、